

## Special Essay

## 本を読もう！

医療センター病院長

伊藤 雄平

最近、「フクシマ以後の生き方は若者に聞け」という本をたまたま手にした。少し内容をひもといてみよう。著者は1995年から2000年初期に”ゆとり教育“を提唱、推進した元文部官僚の寺脇 研氏である。寺脇氏は文部省を退職して、天下りすることなく、自分で京都造形芸術大学に職を求め、若者との数々の接点を持ち続けている。本の題名には“フクシマ”がついているが原発事故とは直接関係はない。「これからの新しい時代を切り拓くのは若者である」というメッセージを込めた著書である。時はまさに“ゆとり教育”世代の若者が社会で活躍し始めている。

“ゆとり教育”が否定されてかなり時間が経過した今でも、世界の子どもたちとの単純な成績比較などから、日本の学力低下は”ゆとり教育”が原因であると一刀両断に”ゆとり教育=悪”と決めつけるテレビなどの論調は消えない。しかし、この本を読み進んで行くと、テレビなどの断片的な報道からは窺い知る事のできない理念があることがわかる。“ゆとり教育”の目的を“豊かな人間性の形成と生きる力をバランスよく育む事”としている。それがマスメディアがこぞって称した“想定外”のフクシマのような、初めての体験にも自ら考え、自ら問題を解決して行く力の源になると主張している。寺脇氏の主張を読み進むと、その目指した教育が極めて全うなものであることがわかる。また、本の随所に寺脇氏と若者との接点、文化活動に対する主張や人物評などが忌憚なく述べてあり、氏の考え方を身近に感じることができる。まさに本の醍醐味であり、文章表現は個性である。

マスメディアにはたくさんの種類がある。特にテレビでの発言は後世に残らない。最近、そこに風穴を空けつつあるのがYouTubeである。しかし、それも報道機関が意図的にカットしたテレビでの発言の全体像を見ることができるとは、時期がすぎれば見向きもされず、主張として残る事はない。タイムリーではあるが活字として残らないマスメディアからの情報も必要ではあるし、それがマスメディアの使命でもある。しかし、本はテレビやYouTubeなどの画像と異なり、後世まで残る活字となり、著者が練った主張と息吹を我々に伝える。

我々が手にする分厚い医学書にも編集方針という編集者の意図があり、執筆者の考えがある。医学生も分厚い医学書、そして医学以外の分野の本に親しむ時間をもっと作ってもよいと思うこの頃である。

